

論文番号 15

担当

滋賀医科大学 福祉保健医学講座

題名 (原題/訳)

Moderate Alcohol Consumption and Risk of Heart Failure Among Older Persons

高齢者における中等度の飲酒と心不全のリスクとの関係

執筆者

Jerome L. Abramson, Setareh A. Williams, Harlan M. Krumholz, Viola Vaccarino

掲載誌 (番号又は発行年月日)

JAMA. 2001; 285:1971-1977.

要旨

大量飲酒は心不全を引き起こす。しかし中等量の飲酒と心不全のリスクとの関係については分かっていない。心筋梗塞に対するリスクが低いという中等度の飲酒の関連性とは別に、飲酒が高齢者の心不全のリスクを予測するものであるかどうかを明らかにすることを目的としている。

1982年～1996年にかけて前向きのコホート研究を実施した。最長追跡期間は14年である。対象は、ベースラインにおいて心不全のないコネチカット州ニューヘーブン在住でかつ施設に入所していない2,235人の高齢者(平均年齢、73.7年;男性の21.3%、非白人の41.2%)である。ベースライン調査の前月に70オンス以上のアルコールを飲んだ対象者は除外した。主たる測定項目は、ベースライン調査前月の飲酒量と心不全(死亡、生存を問わない)の初回発症日時であり、両者の関連をみた結果、中等度飲酒者群において飲酒量の増加と心不全の発症率の減少との関連が認められた。すなわち、飲酒量0の群(50%)、1～20オンスの飲酒群(40.2%)、21～70オンスの飲酒群(9.8%)の心不全の1,000人年あたりの粗罹患率がそれぞれ16.1、12.2、9.2であった。

年齢、性、人種、教育、狭心症の有無、心筋梗塞の既往、糖尿病の有無、追跡期間中の心筋梗塞の有無、高血圧、脈圧、BMIと現在の喫煙で調整すると、ベースライン調査前月の飲酒量で飲酒量が0の群、1～20オンスの群、21～70オンスの群の相対危険度はそれぞれ1(これを対照とする)、0.79(95%の信頼区間[CI]、0.6–1.02)、そして0.53(95%CI、0.32–0.88)であった。

高齢者において、中等度飲酒のレベルの増加(中等度飲酒群における飲酒量の増加)は心不全のリスクを減少させる。この関連は多数の交絡因子から独立していて、またこの関連は中等度の飲酒が心筋梗塞のリスクを下げるという現象とは関係が無いように思われる。